

ローマ世界の周縁で社会的階梯を上下する

——ペロポネソス半島諸都市の場合——

アタナシオス・リザキス

訳：佐藤 昇

〔解題〕

本稿は、第3回日欧古代地中海世界コロキウム（2014年4月、British School at Athens）において、アタナシオス・リザキス Athanasios D. Rizakis氏が報告した原稿を日本語訳したものである。リザキス氏は、1979年にリヨン第2大学で学位を取得後、フランス、ギリシアで教鞭を執り、ナンシー第2大学で古代史教授を務めた他、2010年までギリシア国立研究基金センター National Research Foundation Centreにおいてリサーチ・ディレクターの地位にあった。ローマ時代のギリシア世界について、主に碑文史料を用い、プロソポグラフィの手法を駆使しながら、政治・社会史を研究している。ローマ期ギリシア碑文研究の第一人者であり、これまでに数々の論考を英語、仏語、希語により発表している（なお、リザキス氏は2009年の第2回日欧コロキウム（東京大学）にも参加しており、そちらの報告はKODAI最新号に掲載されている）。リザキス氏について詳しくお知りになりたい方は、本人のホームページをご覧ください（URLは、<http://a-d-rizakis.com>）。

本稿は、ローマ期ペロポネソス半島における、社会的階層間の流動性についてまとめたものである。ローマ帝国の支配下に入ったギリシア世界は、ローマがもたらした破壊と混乱から復興するにあたり、イタリアからの入植者を受け入れた。このことは、現地の地域社会にいかなる影響を及ぼしたのか、影響を及ぼさなかったのか。新旧エリートの社会的流動性は、具体的にいかなる様相を呈していたのか。こうした問いに対して、碑文史料を基に、具体的事例を示しながら、概観が提示されている。口頭報告であるため、典拠、参考文献の提示が不十分であることは否めず、この点をご容赦願いたい。とは言え、ローマ期ギリシアに関して日本語で読める研究は、まだ多いとは言えない。他方で、碑文史料の豊かな、ローマ時代のギリシア世界は、欧米ではすでにリザキス氏や、本稿でも言及のあるスポーフォース A. Spawforth、オールコック S. E. Alcockらを始めとして、研究の蓄積もあり、国内でも関心が高まる傾向にある。本稿から、そうした動勢の一端を垣間みていただければ幸いである。なお、古典語の表記は、原則として報告原稿原文に即してかな書きに改めるものとする。すなわち、ギリシア人の人名のうち、とりわけローマ帝政期に活躍した人物などには、ラテン語形が用いられ、ギリシア圏の地名や特有の役職名などにはギリシア語形が用いられている。また、慣用のあるものを除き、固有名詞の音引きは省略した。

ローマ統治期における人口動勢および社会の様相

ギリシア世界では、ローマ征服以前、ヘレニズム時代からすでに、社会の安定が切望されていた。前2世紀初め以来、ローマがギリシア情勢に介入するようになると、その結果、社会内部の不和は激化し、ギリシア世界が自由であった最後の数年、紛争は頂点に達していた。ローマは、長期に及ぶ対立と戦争によってギリシア世界に社会的混乱をもたらしていたため、覇権を確立してからの数年、社会秩序回復に努めていた。しかし、この努力も、地元側の反応に加え、ローマ自身が直面した内乱のために、成果を上げることはなかった。ローマ内乱に際して、実際に戦火が巻き起こったのはギリシアであり、

それによりギリシアに貧困がもたらされ、社会は恒常的に危機に瀕していた。こうした過渡的な時期にあって（前 146～前 31 年）、ローマは、イタリアからの入植を促す程度にしか関心を示していなかった。入植者たちは、それぞれ自発的に、経済のさまざまな分野に投資するため、ギリシアに移住し始めた。たしかに、こうした移民の中には、結婚や軍事教練（エフェーベイアー）、不動産所有特権（エンクテーシス）の獲得を通じ、現地の市民権を獲得するための過程を経て、現地社会の一員になる者もいた。しかし、そうした地理的な水平方向の流動性が、ギリシア諸都市の人口動態や社会・経済的衰退に及ぼした影響は、どちらかと言えば小さいものであった。

一部地域で、人口動勢や社会の様相を一変させたのは、前 48 年、カエサルがファルサロスで勝利して以後に行なわれた、ローマ植民市の建設であった。これは大きな意味を持つ出来事であった。というのも、この植民都市建設は、入植者たちの自発的行為ではなく、元老院の決定により、大規模に行なわれたのである。これにより、従来からの人口動勢、社会政治構造、そして勢力バランスが一気に変化した。植民都市という新たな政治共同体の統治を担うエリートは、ローマ市民に限られた。したがって、ローマ市民であるということそれ自体が、新旧住民を分ける要素となったのである。都市の役職や聖職は、いまや新たな居住者および彼らの子孫のものとなった。旧来の住人は、もはやインコラ〔＝ローマ市民権のない劣格住民〕となり、政治上の特権的地位を失ってしまった。それまでローマは、新たな「植民市」はともかくとして、旧来のギリシア諸都市に対しては、既存の政治システムや社会バランスを混乱させるような変更をもたらさないよう、手控えていた。これは、自由を認められた「自由市」の場合も、そうでない「外人都市」の場合も同様であった。しかし、ここにきて初めてローマも、彼らを新しい秩序の枠組みに組み入れることに関心を示し始めた（ただし、地域ごとの特殊な要素を蔑ろにすることはなかった。とりわけ、そうした要素が統治システムを適切に機能させるのに貢献していた場合には、なおさらであった）。実際、アウグストゥスによって導入された行政改革は、「ローマの平和（パクス・ローマーナ）」と相俟って、今や、経済復興と、社会が成長するための決定的機会をもたらした。

ローマの征服と社会的安定性の回復

はじめに概観を提示しておこう。第一に、ローマ世界にとって、社会が不平等であるということは、社会構造の基盤となる不変の原則であった。社会を構成するさまざまな集団は、政治的もしくは法的な次元において平等ではなかった。G. アルフェルディは、ローマの社会構造をピラミッド状に提示してみせている（Alföldy 1986）。最上層には元老院議員身分および騎士身分、最下層には、劣格者、すなわち、法的、政治的権利のない者たちが据えられている。その間には、当然、都市を構成する様々な集団からなる、中間的なカテゴリが存在する。その階梯の最上層には地方貴族が、底辺には都市民衆（プレープス・ウルバーナ）がいた。

第二に、ローマは伝統的に、上層階級を好ましく思っていた。たしかに、ローマ支配下のギリシア世界にあって、それ以前から継続する側面は色濃く残っていたが、その一方で、この時期には明らかに寡頭政を指向する傾向が確認できる。当然、上層階級は

何としても権力、名誉、富を独占しようとしていたが、権力に与ろうとする新興の一族から圧力を受け続け、いつまでも抗い続けることは困難であった。それ故、それぞれが属する社会的カテゴリの間には明確な境界線が引かれていたものの、垂直方向の社会的流動性は、至るところで見られた。誰かが社会的に後退すれば、新たな人間がその穴を埋め、社会的階梯を上り、社会的上昇を果たした。もちろん、顕職階梯（クルス・ホノールム）〔＝公職の出世コース〕と社会的階梯は、「植民市」、「自由市」、それ以外の「外人都市」という各々の枠組みの中で、異なる道を辿るものとなっていた。

「顕職階梯」と植民市における社会的流動性

ギリシア語およびラテン語碑文には、植民市における顕職階梯の諸段階が示されており、地方都市参事会員級の人々について知ることができる。この階梯は造営官（アエディールス）職に始まり、最上位には二人委員（ドゥウムウィル）と五年毎の二人委員（ドゥウムウィル・クインクエンナーリス）の職が据えられている。最上位にまで到達できるのは、一握りの植民市エリートのみには過ぎない。いくつかの植民市では、公職経歴の最初の方に財務官（クァエストル）職が確認されているが、十中八九、恒常的な職務ではなかったらしく、顕職階梯の一段階をなしてはいなかった。義務役（ムーヌス）と顕職（ホノル）の中間に分類すべきであろう。

都市公職者の経歴をみると、この財務官留まりで終わったケースがいくつか確認されている。これは、地域の顕職階梯の最上位に位置する役職が、少数の人間によって統制されていたことを意味する。コリントスやデュメといった、カエサルが建設した植民市では、解放奴隷がこうしたエリートの一角を占めており、法的には低い地位にありながら、さまざまな役職を務めていた。例えば、前 42/1 年、コリントスの植民市最初の二人委員のなかには、アントニウスの友人である、ガイウスの息子、マルクス・インステイウス・テクトゥスがおり、この人物は、二人委員に加え、五年毎の二人委員まで務めている（Stansbury 1990: 130-131）。こうした解放奴隷たちは、もちろん、ストラボンが言うように（『地誌』8巻6章23節）、自由身分を出自とする、衰れで貧しい住民ではなく、勢力のある豊かな解放奴隷（リーベルティー）身分に属し、当代きっての有力政治指導者、カエサル、アントニウス、オクタウィアヌスらと直接の繋がりを持っていた。コリントスやデュメでは、ウィセリウス法が通過するまで、解放奴隷が政治的重要性を保ち続けた（最終的に、後 24 年、同法の制定により、彼らは、都市公職への就任資格を失うことになる）。対照的に、アウグストゥスが建設した植民市パトライの場合、支配層は、当初から、富裕な退役軍人入植者の一団とその後継者たちに限定されていた。

一般に、十分な経済力のなかった植民市入植者およびその子孫たちは、上級公職の候補者になることは有り得たものの、選出されることはなかった。また、これとは別に、経済力はあるものの、下級の官職にしか就任できないケースもあった。なんらかの理由で都市参事会入会のための法的条件を満たしていない者たちは、標章（オルナーメンタ）〔＝名誉称号〕で満足することになった。都市参事会員の家の息子が、法廷年齢に達していないにも拘らず、都市参事会員身分（オールドー・デクリオーヌム）に入るよ

うなケースが、まさにそれであり、また、法的な地位が低く、公職を務めることがかなわなかった、富裕な解放奴隷にも同じことが当てはまる。しかし、後者が進んだ道程は異なるものであった。富裕な解放奴隷の第1世代は、皇帝礼拝委員（アウグスターレース）となるか、あるいは公職の標章を獲得するに留まり、都市参事会員身分参入を認められて、都市公職を務めることができるようになるのは、次の世代になってからのことであった（Stansbury 1990: 28）。このようなケースは、最下層から、地方都市の公職経歴の最上位にまで上り詰める、もっとも劇的な社会流動の例であった。

旧来の（ギリシア系）住民について言えば、彼らが植民市の政治権力に与って果たした役割など、取るに足らないものでしかなかった。インコラという法的、政治的に劣った地位にあったためである。しかし、例外もあった。コリントス市のプブリウス・カニニウス・アグリッパは、ギリシア人家系の出身であったが、アウグストゥス時代にローマ市民権（キウウィタース）を授与されている。カニニウスは、ティベリウス帝治世の初期に（後 16-17、あるいは 21-22 年）、植民市の最高位の職、すなわち五年毎の二人委員を務めたばかりではなく、属州アカイアの皇帝代理人（プロクローラートル）にも任じられている（*e.g. Corinth VIII 2 Latin Inscriptions 1896-1926: nos. 65, 66*）。このことは、彼が騎士身分に上昇したことを意味している。とは言え、旧来の住民が、植民市エリートの閉じられたサークルの内側に入り込むのは、とりわけ紀元後1世紀の間は、難しいことであった。この状況に対し、2世紀以降、とりわけコリントスにおいて、変化の兆しが見え始めた。さまざまな理由により、旧来の住民でも最も富裕で影響力のある者たちに、都市参事会員身分の扉が開かれたのである。このことにより、支配階級の構成が徐々に混成状態になり、3世紀以降、その状況はさらに確実なものとなった。アントニヌス勅令により、あらゆる政治的社会的障壁が排除され、帝国内の全自由人にローマ市民となることが許されたのである。

自由市及びそれ以外の外人都市内部における社会的流動性の条件

帝国が成立してほどなく、ギリシア諸都市における地方支配者層の構成は、共和政期のものとは、もはや異なるものになっていた。アウグストゥスによって新たな秩序がもたらされると、多くの場合、それによって台頭してきた新興家族が、旧来の貴族的氏族（ゲンテース）とともに地方エリートとして並び立つようになった。アカイア属州内の諸共同体に、国制上の変革あるいは社会政治的な大変化が生じたわけではなかったが、新旧のエリートたちは、他地域と同様、社会の階梯を上るために、3つの段階を踏んでいった。すなわち、都市、属州、そして帝国である。こうした社会流動がはっきりと確認できるのは、上層市民に限られる。碑文に残された記録が利用できるためである。下層の状況はあまり明白でないが、だからといって社会的流動性がなかったということにはならない。とりわけフラウィウス朝〔69-96年〕以後、ペロポネソス半島の地域社会は、徐々に、そして恒常的に変化の波に曝され続けた。実際、都市参事会員身分は、流動性を失っていた期間も僅かにあったものの、その後は継続的に新しい構成員を補充し続けた。ただし、ポンペイのように、下層出身であった新興の一族に、勢力バランスが劇的に傾くようなことはなかった。

社会的階梯を上昇するための条件は、主に3つあった。1. ローマ市民権を保有していること。2. 家に経済力があること。そして、3. 他の貴族的な家柄との間に、社会的紐帯、もしくは婚姻関係があること、以上の3点である。1. すでにアウグストゥス治世より、ローマ市民権は、ギリシア諸都市の富裕者たちを惹き付けていた。とはいえ、ローマ市民権の保有は、地元社会で影響力を行使するための必要条件ではなかった。しかし、これはたしかに属州レベルあるいは帝国レベルで、社会の最上層に上るための条件ではあった。諸都市の支配層の大多数は、2世紀までにローマ市民（キウエース）となっていた。輝かしい経歴は、まず種々の地方公職を務めるか、軍役をこなすか、あるいはその両方から始まっている。やがてそうした経歴は、名士の場合、地元の皇帝礼拝神官団へと繋がる場合もあり、また稀に属州レベルの役職へと繋がることもあった。しかし、騎士身分や元老院議員身分になることができたのは、ペロポネソスでは、ごく例外的な、僅かな家の者ばかりであった（およそ12家族）。

2. 新旧いずれの貴族的家柄にとっても、下級の役職に停留することを回避し、地域の顕職階梯を最上位まで上り詰めるのには、経済力がものを言った。単なる像の奉納から記念碑的建築の建設事業まで、さまざまな経済的貢献を気前よく行うことが、選挙に勝利するための必要条件となった。どの都市でも少数の限られた富裕な一族が、恵与文化（エウエルジェティズム）の分野において活発に活動し、都市の紀年官職に与り、そうした職務を何度かくり返しつつ、顕職である監察官（ケーソル）職就任の道を得ていた。

エウリュクレスの一族は、この点に関する典型例である。この家は、当初からスパルタ市という狭い範囲をはるかに越えて恵与活動を行っていた。スパルタ、コリントス、メッセネといった都市で、劇場建設をはじめとする大規模公共事業に関与し、さまざまな財政拠出も行っていた（例えば、Rizakis 2009などを参照）。サエティダ一族もメッセネにおいて同様の活動に従事している。この点を最もよく示しているのは、ティベリウス・クラウディウス・サエティダ・カエリアヌス1世のために、劇場の舞台（プロスカエニオン）に設置された顕彰決議碑文である（MES 156）。2世紀、アントニヌス朝の時代〔138-192年〕に至るまで、この人物の富と名声に比肩する人物は殆どいなかった。それ故にこそ、カエリアヌス1世は、パウサニアスの著作に名を記されているのである。そこでは、この人物が英雄祭祀の対象となっているとされている（『ギリシア案内記』4巻32章2節）。

3. 社会的交流と婚姻による結合。野心的な一族は、他の有力一族と関係を結び、育むことに大きな関心を抱いていた。地方レベルにおいて、彼らは交流をくり返し、互いに貢献し合うばかりでなく、ときに姻戚関係を形成することもあった。それはさらに、数世代後に政治的成功へと繋がることもあり、出世にとって重要な要素であった。婚姻によって結合していた事実は、その家が新たに用い始めた名前、あるいはよく用いている名前によって明らかにされる。例えば、メッセニア地方のクラウディウス・フロンティヌスは、マルクス・アウレリウス帝〔在位：161-180年〕の治世に元老院議員を務め、補

充執政官（コーンスル・スッフエクトゥス）にまでなった人物であるが（*IG* V.1, 533, 1455; *CIL* X, 1122-24）、彼の同名の息子には、添え名（コグノーメン）としてニケラトゥスという名前が付けられている。これは同家が、妻を通じて、メッセニア地方の別の有力家系に属する、テオの息子ニケラトゥスの家と親戚関係にあったことを示唆している。ガイウス・ユリウス・エウリュクレス一族は、スパルタの古い貴族の家柄、メンミウス家との姻戚関係を開始した。アウグストゥスの加護を受けていたこの人物も、名門の出ではなかったため、こうした婚姻関係から高貴な血筋を得ようとしたのだろう。事実、プブリウス・メンミウス一族には、上述のエウリュクレス一族に典型的な名前、ラコヤスパルティアティクスといった名前も見出されるようになる（Settipani 2000: 491-495）。

他にも、遠くの都市との繋がりを確保することで、ギリシア世界における影響力を拡大できる家があった。ペロポネソスのポンペイウス一族（スパルタ、アルゴス、メガロポリス）は、レスボス島の有力家系とペロポネソスとの間に繋がりがあったことを示している（例えば、タキトゥス『年代記』6巻18章2節）。他にも、A. スポーフォースが示したように、エピダウロス市のスタティリウス家は、スパルタのウォルセヌス家やメンミウス家と、都市を越えた関係を有している。これらは、典型的事例と言えるだろう（Spawforth 1985: 193-224）。

ペロポネソスの家系の中で、ローマの著名人、首都の最有力家系と姻戚関係を結ぶことに成功した例はきわめて限られているが、成功した暁には、その家族のローマ的な様相が強化され、さらなる栄達への扉が開かれた。例えば、ネロ帝〔在位：54-68年〕の時代に神官を務めたメッセニア人、ティベリウス・クラウディウス・アリストメネスの息子に、ティベリウス・クラウディウス・ディオニュシオス・クリスピアヌス1世という人物がいる。彼の母親ゲモニアについては何も知られていないが、息子に付された新たな添え名クリスピアヌスは、他にもない、母親自身が属していたローマの有力氏族、クリプス氏族とこのメッセニアの家族との繋がりを表しているものと考えられる。次の例は、さらに興味深い。ティベリウス・カエリアヌス・クラウディウス1世の息子、フロンティヌス1世のフルネームは、ティベリウス・クラウディウス・フロンティヌス・カンパヌス・マケルである。彼は、アントニヌス・ピウス帝〔在位：138-161年〕の治世に、ペロポネソスで最初に執政官（コーンスル）職（補充執政官）の地位にまで達した人物であるが、その名前が、ローマの家系と親類関係にあったか、もしくは養子縁組によって関係が生じていたことを示している。こうした関係が、きわめて高い地位を獲得するための一助となったのだろう。サエティダ家もまた同じく、影響力のあるローマの一族と、最良のつながりを築くことに成功していたようである。ティベリウス・サエティダ・ケテグス・クラウディウスが設置した、コルネリア・クァエトウラのための追悼の碑が（*CIL* VI, 16440）、ローマのコルネリウス氏族と何かしら関係があったことを示唆している。建立者の母親は、おそらくケテギッラ・コルネリアであり、彼女は、マルクス・ガウィウス・スキッラ・ガッリカヌスとポンペイア・アグリッピナの娘なのである。

ローマ期スパルタにおける社会変動：事例紹介

それでは、ローマ期スパルタの社会的流動性に関して、いくつか具体的な事例を見ていきたい。はじめに、スパルタの最重要一族の名前がいくつか含まれている、アウグストゥス治世初期に作成された、とある碑文を見てみよう（*IG V.1, 141-142*）。そこには、儀礼・祭祀挙行のため、ヒエロテュタイ *ἱεροθύται* という神官団に随伴していた子供たちの名前が列挙されている。これらの名前が、帝政初期のスパルタ貴族社会の構成を垣間見させてくれるのである。事実、そこでは初めて、新旧の家族が併存しているのである。子供たちの筆頭に挙げられているデクシマクス（I: 1.19）とシデクタス（I: 1.21）はおそらく兄弟で、「シデクタスの末裔」であり、共に祭祀の神官職に就いている（Spawforth 1985: 196）。両者は、スパルタにおける最も重要な2つの旧家、プラトラウスの一族とシデクタスの一族に属している。これとは対照的に、同碑文に刻まれているエウリュクレスの息子ラダマンテュスとエウリュクレスの息子デクシマコス（Spawforth 1985: 193-4）は、新人（ホモー・ノウス）の子供たちである。すなわち、彼らの父親は、スパルタの新人にして第一人者、エウリュクレスだったのである（この父親の地位は、おそらく、この年長の子たちが亡くなった後、ガイウス・ユリウス・ラコが継いだのであろう）。

この初期の記録は、ローマ期スパルタの碑文記録の中でも例外的である。実のところ、ユリウス・クラウディウス朝期には史料上の空白期間があり、スパルタ貴族の経歴は、ネロ治世の晩年になってようやく迎えられるようになるのである。フラウィウス朝期になると、公職者一覧の充実ぶりは目を見張るほどで、スパルタの劇場入り口（パロドス）には、壁面を覆わんばかりの経歴が刻まれ、残されている。「一連のリストには、（古いものから、新しいものに至るまで）ある種の階層構造が残されている。また、個人名に加えて、就任した役職名（ブーアゴス *βουαγός*、シュネフェーボス *συνέφηβος*、カセン *κάσεν*）、時には頭職階梯の全てが残されていることもある（*IG V.1, 36, 37, 39-40, 65, 70-71, 78, 85, 101, 105 and 109*）」（Steinhauer 2006/7: 205 n. 38）。

碑文史料の増大は、1世紀後半におけるスパルタの政治的發展と関係があるのかもしれない。理由はともあれ、これによって、スパルタの最有力エリート一族の公的活動をある程度追跡することができる。ガイウス・ユリウス一族〔エウリュクレスの子孫〕、プブリウス・メンミウス一族、ティベリウス・クラウディウス一族、ルキウス・ウォルセヌス一族がこれに該当する。スパルタの公的生活に、より長く留まっていたのは、メンミウス家とウォルセヌス家である。メンミウス家は、フラウィウス朝からセウエルス朝に至るまで、数世代にわたって継続的に、軍事教練に参加し、地域の役職を務め、都市の祭祀において男女とも顕著な活躍を見せた。スパルタでも長命を保った第2の貴頭一族は、ルキウス・ウォルセヌスの一族である。この一族は、アクティウムの海戦の数年前に、初めて史料に登場した（確認されている限り最初の人物は、ダマレスの息子アリストクラテスで、三頭政治期の銅貨に刻まれている）。ウォルセヌス家は、関係のあるスパルタのメンミウス家やエピダウロスのスタティリウス家と同時期に、ローマ市民権を獲得している。この一族については、とりわけクラウディウス帝の治世からアントニヌス朝期にかけて顕著に記録が残されているが、その活躍は地域レベルに留まらず、

都市の枠を越えた人脈を形成していた。スポーフォースが述べているように、彼らは「アテナイ及びエピダウロス一族との親類関係に加え、メガロポリスとリュコスーラにも繋がりがあった。こうしたことも、彼らの社会的な広がりが、スパルタそれ自体を大きく越えて広がっていったことの証拠として加えるべきであろう」（1985: 222-224）。

これらの貴族たちは、伝統的祭祀にも深く関与し、ユリウス・クラウディウス朝期にはローマ市民権を獲得していたが、騎士身分あるいは元老院議員身分にまで身分上昇を果たすことはなかった。対照的に、エウリュクレス一族は、ラコがクラウディウス帝〔在位：41-54年〕の治世に騎士となり、ハドリアヌス帝〔在位：117-138年〕の治世にはローマの元老院議員を輩出している。多くの研究者たちが、エウリュクレスを新人と考えている。彼は、アウグストゥスによりローマ市民権を与えられ、スパルタにおける絶対的権力を認められた。他方で、同家には、アゲシニコス、レオニダス、ラコニコスといった名を冠する者たちがおり、スパルタの最有力伝統的家系、アギス王家に属する、アゲシポリス、レオニダス、ラコニコスといった名前を想起させる。たしかに、こうした名前の類似性が、両家に直接的関係があったことを示唆している可能性も考えられる。しかしながら、この場合は、新興の一族が、それほど高貴な祖先だと気づかぬまま、自分たちを伝統的家門と結びつけようとしたという方が、蓋然性が高いように思われる。そうした態度があったことを、プルタルコスの短い一文が伝えている（『王と將軍たちの名言集、アウグストゥス』14節）。帝政初期、エウリュクレス家は新興の一族と見なされており、名門ブランダス家は、そのスキャンダラスな昇進に強く抗議していたようである。

他に、やや遅れて、2世紀になって、スパルタ市の公的活動に目立って参与するようになった一族もいる。プブリウス・アエリウス・アルカンドリダスの一族は、おそらくハドリアヌス帝がスパルタを訪問した際に（124/5年および128/9年）引き立てられたようである。この一族は、他の一族との婚姻や養子縁組のおかげで、1世紀以上続き、さまざまな都市の公職に従事した。上記の人物は、ローマ市民権を授かった一族最初の人物で、いくつかの下級の公職を務めた後、ハドリアヌス帝期（あるいはその後）にブーアゴス、エンセイトスおよびゲロンテウオーン *βουαγός, ἔνσειτος καὶ γερωντεύων* の職位にあった。同名の孫（LAC 6、プブリウス・アエリウス・ニカンドリダス（LAC 16）の息子）は、145-175年の間にアゴラノモス *ἀγορανόμος* 職を務めている。一族中最も卓越した人物は、プブリウス・アエリウス・ダモクラティダスの息子、プブリウス・アエリウス・アルカンドリダス3世（LAC 9）で、アエリウス・アルカンドリダス2世の孫だと考えられる（LAC 6）。彼は、後3世紀前半、スパルタで最も輝かしい経歴を持ったスポーツ選手であり、競技での偉業の見返りに数多くの褒賞を手に入れ、プラタイアイ市のエレウテリア祭で催された徒競走青年の部で優勝した際には、「最優秀ギリシア人（アリストス・ヘッレーノーン）」という称号を得ている（Robert 1929）。彼は、スパルタの顕職階梯を全てこなし、顕彰されて、愛国者（フィロパトリス）の称号（おそらく都市に対する大規模な経済的拠出の見返りとして）と皇帝信奉者（フィロカイサル）の称号（おそらく、彼が高位神官職を務めた皇帝祭祀との関係から）を得た。

メンミウス家やウォルセヌス家に比べると、ティベリウス・クラウディウス家は、遅れてスパルタの公的活動に参加し始めた。この家についてはかばかしい記録が確認できるのは、ようやくマルクス・アウレリウス帝治世以降のことであるが、その後は、スパルタの碑文史料が激減する3世紀の半ばまで、しっかりと確認できる。クラウディウス家は、メンミウス家の末裔と結婚をくり返しており、メンミウス家共々、ポセイドンの末裔を主張した。この一族は、知られている限り2人しかいない、スパルタ出身元老院議員のうち的一方、クラウディウス・ブラシダスを輩出している。これは十中八九、『学説彙纂（ディーゲスタ）』の中で「ブラシダスなる人物は、ラケダイモン人の法務官（プラエトル）級の人物である」と言及されている人物であろう（XXXVI.1.23）。セッティパニは、彼の生没年を105年生、161年没としている（LAC 274; Settipani 2000: 492 n. 11）。ブラシダスはハドリアヌス帝治世の終わりにかけて、あるいはアントニヌス・ピウス帝治世の最初に、ローマの元老院に参入した。彼はまた、地元の役職を数多くこなしている。この一家の先祖については、推測の域を出ないが、おそらくクラウディウス帝、もしくはネロ帝治世にローマ市民権を手に入れた可能性が高い。また、元老院議員ブラシダスの孫、ティベリウス・クラウディウス・アリストテレスに付された添え名から考えると、この元老院議員が、彼より先に活躍していた、ティベリウス・クラウディウス・アリストテレスという名の2人のスパルタの名士と親類関係にあった可能性が十分に考えられる。このうち一方は、ポセイドンの末裔と称していたが、これは元老院議員ブラシダスの別の孫、ティベリウス・クラウディウス・アエリウス・プラトラウス（2世）別名ダモクラティダスも同様であり、彼はポセイドンの神官職を世襲していた。アリストテレスとブラシダスの親類関係は興味深い。なによりこの関係は、後者をかのヘロデス・アッティクス一族と結びつけるからである。というのも、前者アリストテレスの家の者が、ヘロデスの姉妹の一人と結婚しているのである（Spawforth 1985: 225）。

この元老院議員が2度の結婚によって設けた子供たち、そしてその子孫は3、4世代に亘って継続して活躍した（Spawforth 1985: 226-231）。ブラシダス1世の4名の息子のうち、プラトラオス1世、スパルティアティクス及びブラシダス2世は皆スパルタで公職を務めており、前2者の子供たち及びブラシダス1世の長子アンティパトロスの娘も同様であった。ブラシダス2世は、異母兄弟プラトラオス1世とともに「最優秀市民 *ἀριστοπολιτευτής*」の称号を得た。これは、「最優秀市民コンテスト」で優勝したことを示している。彼はまた、スパルタにおける皇帝礼拝のための神官の称号も得ており、これは支配権力とも結びつけられていた。彼はこの職を2度務めている（Spawforth 1985: 235-236; 「諸皇帝および神である彼らの祖先たちのための最高神官（アルキエレウス）、2度」と記録されている。アントニヌス朝期以降、この役職は終身ではなく、任期付となっていた）。ブラシダス1世の子供たちの中に、元老院議員としての経歴を求めた者はいないようである。ただし、元老院議員の息子として元老院議員身分は継承していたであろう。元老院議員となるために、1,200,000 セステルティウスの財産資格が設定されていたことを考えると、異母兄弟プラトラオス1世を含め、この兄弟が地元に残り続けた理由の一部に、経済的負担があった可能性も考えられよう。とはいえ、

彼らは都市の活動では精力的であった。彼らを顕彰する際に用いられている賛辞「最も価値のある（アクシオロゴータトス）」「全てのうちで一番（パンタプロートス）」は、スポーフォースが注記しているように、「地域共同体の中で高い社会的地位にあること」以上のことを意味しているわけではない（1985: 237）。

以上に示した事例は、都市のスーパーエリートたちである。これより低いレベルでは、より多くの地方エリート家族が、都市の責務を果たし、公的活動に参入していた様子が伺われる。しかし、彼らは大抵、1、2 世代以上、トップに留まり続けることはなかった。前1 世紀および後1 世紀に、スパルタの公的活動がエウリュクレスの一族に独占されていたのだとすれば、フラウィウス朝期には、多くの家族が権力競争に参加するようになり、政治的風景が変化した事になる。

社会的下降

社会層を下降するには、種々の原因が考えられる。軍事、政治的な指導者と近い関係にあれば、昇進の要素にもなり得たが、社会的後退にも繋がることもありえた。

大ポンペイウスの友人たちは、ファルサロスの戦い（前 48 年）の後、パトライをはじめとする多くのギリシア都市において、完全に公的活動から追いやられてしまった（こうした者たちとキケロのやり取りを想起されたい）。アントニウスの友人たちも、アクティウムの海戦（前 31 年）でオクタウィアヌスが勝利して後、同じ道を辿った。政治的に生き残った例外も僅かばかり確認されるが、時宜を得て変節するような、先を見通す力のある場合に限られた（例えば、コリントスがその例である）。また、子孫が絶え、あるいは夭折が連続することで、一時活躍した家族がすぐに姿を消すこともありえた（例えば、エピダウロス市のスタティリウス家のランプリアス [e.g. *IG* IV².1, 82-6 with *SEG* XXV, 304-5] は夭折し、スパルタ市のエウリュクレス一族に属する元老院議員ヘルクラヌスは嫡男を残せなかったようだ）。さまざまな要因から家族の経済状況が悪化し、もしくは破産に陥り、身分保持に必要な資産水準にもはや届かなくなってしまうような事態も、関係していたかもしれない。

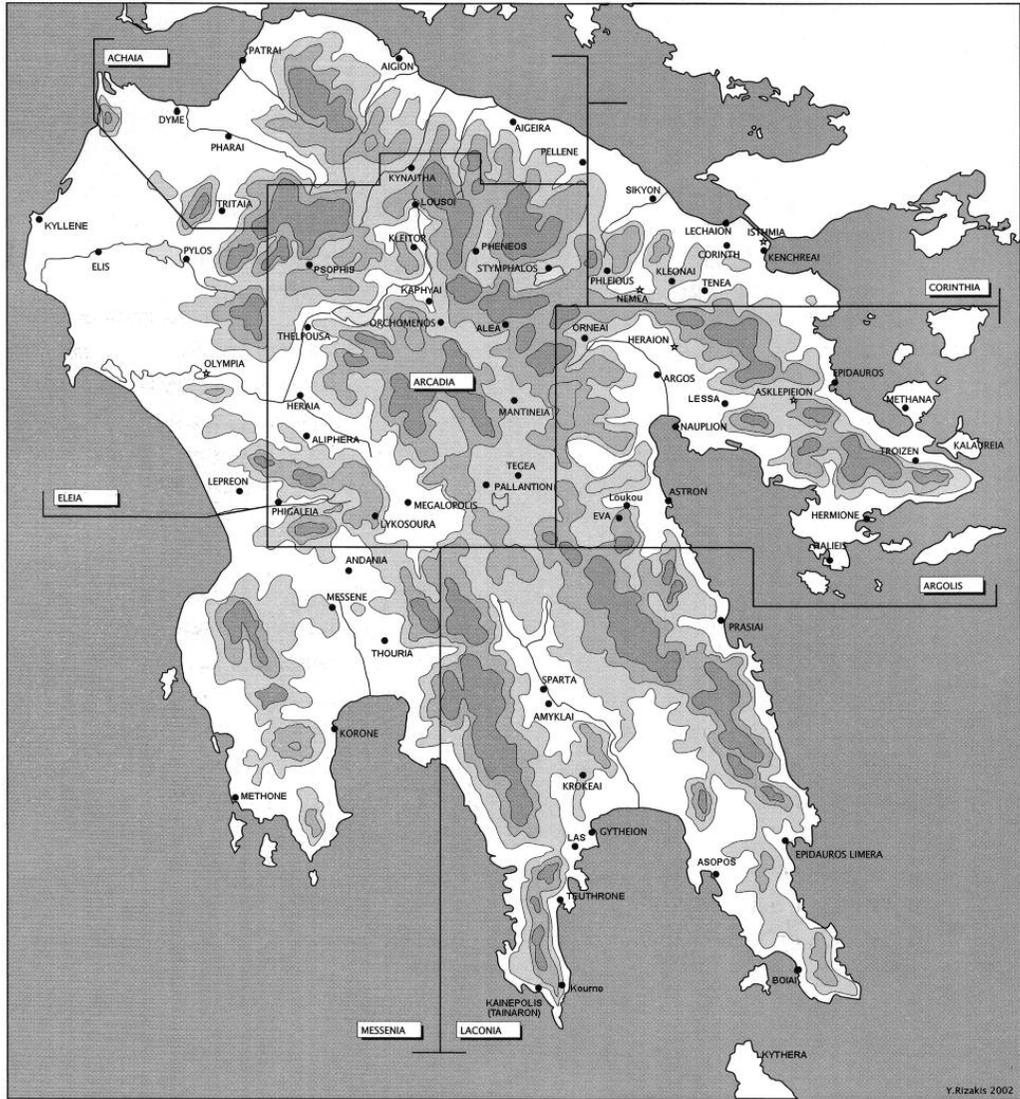
結論

ローマ帝国が成立して2 世紀ほどの間、確認可能な限り、ペロポネソス半島諸都市の社会的流動性は、基本的には急激にも、あるいは段階的にも、帝国成立当初に確立されていた秩序を覆すようなことはなかった。ローマ植民市の変動状況は有名だが、これは例外であった。多くの場合、初期のエリートたちは徐々に、自分たちと同じような政治社会環境にあった、あるいはそれ以下の階層に属した、新興の家族に道を譲った。こうした新興の一族が社会上昇を果たすと、伝統的なエリートは関心を掻き立てられ、こうした脅威を抑えるために種々の手だてを試みた。このことに関するアテナイ市民と、ルキウス・ウェルスとマルクス・アウレリウスのやり取りを想起されたい。アテナイ市民たちは、アレイオスパゴス評議会の評議員には、トリゴニア *τριγωνία*、すなわち3 世代にわたって自由身分であることを求めていた。マルクス・アウレリウスは、解放奴隷がアレイオスパゴス評議会に議席を持つことを禁ずる法の制定を強行した (*SEG* XXIX,

127; Oliver 1970: 57-63 も参照)。しかし、最終的に彼は、両親さえ出生自由人であれば、祖父母の身分については問わないというところで妥協した (Oliver 1989: 366-388, no. 184, ll. 57-69 参照)。こうした激しい抵抗は、彼らの弱さを露呈している。有力な家族は、婚姻政策や養子縁組を通じて、公的世界における第一級の地位を保持し続けようと絶えず試みたが、長期的には衰退を回避することはできなかった。古代にあって、有力家系の廃絶は、現実的な脅威であった。出生率は低く、夭折もしばしばで、さらに、複数の子孫によって財産が共有されることも、家の衰退に繋がった。こうした諸要素が、社会の構成を恒常的に更新させることになった。ある家族が、経済基盤をすり減らし、衰退すれば、新しく上昇してきた、より野心的な氏族に道を譲ることになった。

こうした更新は、概して、社会の安定性、あるいは社会秩序にとって脅威となることはなかった。2 世紀には継続的に変化し続けていたのであり、都市参事会員身分の中に地位の低い者がいたのは、社会的背景が不均質であったこと、そして社会内部に階層的秩序があったことを反映している。こうした安定的な変化傾向が確認できるとはいえ、旧家の中には、第一人者の地位に留まり続け、経済、社会、政治において主要な役割を担い続けた者もあった。都市参事会員身分への新規参入は、実際の権力、支配権獲得を意味しなかったのである。新規加入者は、財産を現実的なリスクに曝すことで、参事会身分の空席を埋めたに過ぎなかった。伝統的な家族も、3 世紀の中葉を越えて継続するものはなかった。変化は漸次生じていたが、スーパーエリートの特権を脅かすものとはなっていなかった。変化が新旧家族間の競争あるいは対立構造を成立させることはなかった。ムーリツェンが述べているように、およそ貴頭 (ノービリタース) 間の競争は存在していても、「下からのプレッシャー」はなかったのである (Mouritsen 1997)。都市参事会員に求められる支出は、とりわけ 3 世紀以降 (Pleket 1984)、きわめて高額で、継続的に工面できるような家系はほとんどなかった。いかなる場合であれ、社会的流動性は、もはや大規模で、継続的なものであり、社会的な変化も同様となった。3 世紀の社会の光景は、前世紀のものとは全く異質である。この時期の危機は、政治的、経済的なものに留まらず、社会的なものでもあった。

地図：ローマ時代のペロポネソス (A. D. Rizakis & Cl. E. Lepenioti, *Roman Peloponnese III*, Athens, 2010 より)



【主要参考文献】

- Alcock, S. E., 1993, 'Graecia Capta'. *The Landscapes of Roman Greece*, Cambridge.
- Alföldy, G., 1986, *Die römische Gesellschaft*, Heidelberg.
- Bartels, J., 2008, *Städtische Eliten im römischen Makedonien: Untersuchungen zur Formierung und Struktur*, Berlin.
- Byrne, S. G., 2003, *Roman Citizens of Athens*, Leuven/Dudley Mass.
- Cartledge, P. & Spawforth, A., 2002, *Hellenistic and Roman Sparta*, 2nd ed., London/New York.
- Cébeillac-Gervasoni, M., 1992, La mobilité sociale chez les notables du Latium et de la Campanie à la fin de la République, in Frézouls 1992a: 83-106.
- Chantraine, H., 1967, *Freigelassene und Sklaven im Dienst der römischen Kaiser. Studien zu ihrer Nomenklatur*, Wiesbaden.
- Chrimes, K. T. M., 1949, *Ancient Sparta*, Manchester.
- Démougín, S., 1992, La promotion dans l'ordre équestre: le cas des marginaux, in Frézouls 1992a: 107-121.
- Fabre, G., 1992, Mobilité et stratification: le cas des serviteurs impériaux, in Frézouls 1992a: 123-159.
- Frézouls, E. (ed.), 1992a, *La mobilité sociale dans le monde romain*, Strasbourg.
- 1992b, Aspects de la mobilité sociale dans l'Asie Mineure romaine, in Frézouls 1992a: 231-252.
- Gara, A., 1991, La mobilità sociale nell'Impero, *Athenaeum* 79: 335-358.
- Habicht, Chr., 1997, *Athens from Alexander to Antony*, Cambridge Mass.
- Halfmann, H., 1979, *Die Senatoren aus dem östlichen Teil des Imperium Romanum bis zum Ende des 2. Jh. n. Chr.*, Göttingen.
- Hopkins, K., 1965, Elite Mobility in the Roman Empire, *P&P* 32: 12-29.
- Landucci Gattinoni, F., 2002, L'esercito come veicolo di mobilità sociale: alcune riflessioni sull'epigrafia dei militari camuni, in A. Sartori & A. Valvo (eds.), *Ceti medi in Cisalpina. Atti del colloquio internazionale, 14-16 settembre 2000*, Milano: 199-208.
- Lopez Baria de Quiroga, P., 1995, Freedmen Social Mobility in Roman Italy, *Historia* 44: 326-348.
- Millis, B., 2014, Social Mobility in Roman Corinth?, in S. J. Friesen, S. A. James & D. N. Schowalter (eds.), *Corinth in Contrast Studies in Inequality*, Leiden/Boston: 38-53.
- Mouritsen, H., 1997, Mobility and Social Change in Italian Towns during the Principate, in H. M. Parkins (ed.), *Roman Urbanism: beyond the Consumer City*, London/New York: 59-82.
- Muniz Grijalvo, E., 2005, Elites and Religious Change in Roman Athens, *Numen* 52: 255-282.
- Oliver, J. H., 1970, *Marcus Aurelius: Aspects of Civic and Cultural Policy in the East*, Princeton.
- 1982, Roman Senators from Greece and Macedonia, in S. Panciera (ed.), *Epigrafia e ordine senatorio II*, Roma: 583-602.
- 1989, *Greek Constitutions of Roman Emperors*, Philadelphia.
- Quass, F., 1993, *Honoratiorenschicht in der Städten der griechischen Ostens*, Stuttgart.

- Pleket, H. W., 1984, Urban Elites and the Economy in the Greek Cities of the Roman Empire, *MBAH* 3-1: 3-36.
- Rizakis, A. D., 2001, La constitution des élites municipales dans les colonies romaines de la province d'Achaïe, in O. Salomies (ed.), *The Greek East in the Roman Context*, Helsinki: 37-49.
- 2005, Les affranchi(e)s sous l'Empire: richesse, evergétisme et promotion sociale, in V. I. Anastasiadis & P. N. Doukellis (eds.), *Esclavage antique et discriminations socio-culturelles*, Berne: 233-241.
- 2009, Supra-Civic Landowning and Supra-Civic Euergetic Activities of Urban Elites in the Imperial Peloponnese, in *Being Peloponnesian. Cohesion and Diversity through Time, International Conference, University of Nottingham, 31 March-1 April 2007*, published in <http://www.nottingham.ac.uk/csps/documents/beingpeloponnesian/rizakis.pdf>
- Robert, L., 1929, Recherches épigraphiques. Ἀριστοῦ Ἑλλήνων, *REA* 31: 13-20, 225-26 (= *OMS* II: 758-761).
- Settipani, Ch., 2000, *Continuité gentilice et continuité familiale dans les familles sénatoriales romaines à l'époque impériale: mythe et réalité*, Oxford.
- Sève, M., 2005, Notables de Macédoine entre l'époque hellénistique et le Haut-Empire, in P. Fröhlich & C. Mueller (eds.), *Citoyenneté et participation à la basse époque hellénistique. Actes de la Table ronde des 22 et 23 mai 2004*, Paris: 257-273.
- Spawforth, A., 1985, Families at Roman Sparta and Epidaurus: Some Prosopographical Notes, *ABSA* 80: 191-258.
- Stansbury, H., 1990, *Corinthian Honor, Corinthian Conflict: A Social History of Early Roman Corinth and Its Pauline Community*, unpubl. dissertation, Univ. of California.
- Steinhauer, G., 2006/7, The Euryklids and Kythera, *MedArch* 19/20: 199-206.
- Tataki, A. B., 2006, *The Roman Presence in Macedonia. Evidence from Personal Names*, *Meletemata* 46, Athens.
- Tobin, J., 1997, *Herodes Atticus and the City of Athens. Patronage and Conflict under the Antonines*, Amsterdam.
- Tran, N., 2006, Les affranchis dans les collèges professionnels du Haut-Empire: l'encadrement civique de la mobilité sociale, in M. Molin (ed.), *Les Régulations sociales dans l'Antiquité*, Rennes: 389-402.
- Weaver, P. R. C., 1972, *Familia Caesaris. A Social Study of the Emperor's Freedmen and Slaves*, Cambridge.